

札幌・今井記念館を中心に演奏会

中島聖山

伝統芸能「北海道」の歩み・尺八篇を連載してきたが、今回で10回を越えることになった。

前回から各流派にこだわることなく、尺八界の総体的な活動ぶりを捕らえることとし、第10号ではラジオ放送を通じて、北海道の尺八界の歩みに触れてみた。そこで今回は、温習会も含めた演奏会の開催状況と、各地の様相について探ってみることにする。

年とともに増える演奏会

手元にある資料に基づいて、大正後期から昭和初期にかけての、道内各地における尺八主催の演奏会を拾って見ると、表1のようになる。

これからも分かるように、年を重ねるごとに各流派とも勢力を伸ばし、演奏会開催件数を増加させている。但し、大正12年は前年に比べ13件と極端に増えているが、これは流祖

中尾都山が北海道巡演のため来道し、函館、小樽、札幌、旭川など、全道各地で流本部主催の演奏会を開催したためである。  
琴古流では、竹友社が室蘭を中心に、早くから活動を開始し、荒木古童を会主とする童

表1 流派別開催件数

	大正11	12	13	14	昭和元	計
都山流	1	8	1	5	8	40
竹	2	4		3	3	21
鈴			1	1	6	19
童	1	1		1	2	6
計	3	5	1	2	8	46
上田流				1	2	8
計	4	13	2	8	15	94

※竹友社、鈴鈴慕会、童童窓会

窓会は、函館の長谷川羊童が孤軍奮闘した。また、青木鈴慕の来札が契機となって、鈴慕会も大正14年から演奏会を始めている。  
上田流は青木呂童の来札に合わせ、琴古流、鈴慕会と同様、大正14年から演奏会を始めた。各流派別に開催件数を比較した場合、大正12年に行われた中尾都山来道特別演奏会の6件を除けば、琴古流が一番多く、都山流・上田流の順で続いている。したがって北海道における尺八界の活動は、琴古流が先駆的役割を務め、都山流や上田流が琴古流の活動に刺激され、琴古流を目標に活動を展開してきたと言えるだろう。

都市別の開催状況

北海道の開拓は、開拓使を置いた札幌を始め、函館・室蘭・小樽などの港町を中心に進められたが、尺八音楽もまた都市の発展に伴い、主要都市を核として普及してきた。

山床 かつら

板 坂

板坂又二郎

■店 〒130 東京都墨田区横川2丁目11番5号 (齊藤ビル1階) ☎(03)3621-0166  
■自宅 〒110 東京都台東区根岸2丁目21番17-601号 ☎(03)3875-6183



道内で活躍する会主たちは、技量を磨くためはるばる家元を訪ねて教えを乞いたり、家主主催の演奏会に出演し、中央の邦楽界で活躍する糸方と合奏をした。特に荒木古童が主宰する童窓会に所属していた函館の長谷川羊童は、毎年のように上京し童窓会の定期演奏会に出演した。そして、昭和2年10月9日午後1時より東京丸の内数寄屋橋にある朝日新聞社講堂で行われた、第10回童窓会の定期演奏会では、米川親敏の箏・福田菊子の三絃で「若菜」を演奏した。また、翌昭和3年10月21日に明治神宮外苑の日本青年会館で開催された第12回童窓会の定期演奏会では、富崎春昇の三絃・木谷寿恵子の箏で「御山獅子」を演奏した。

一方、琴古流北海道鈴慕会の藤沢鈴昭は、昭和3年4月1日に帝国ホテル演奏場で開催された、鈴慕会20周年記念演奏会に出演し、箏・米川親敏、三絃・富崎春昇を相手に「青柳」を独奏した。

また、都山流の畑中康山は大正10年3月13日午前9時から大阪の中央公会堂で開催された、都山流創始25周年記念演奏会に北海道代表として出演し、京都の津田検校や大阪の菊原検校を相手に松竹梅を演奏した。

このように、当時北海道で流勢拡大のため活躍していた師匠たちは、中央でも通用する技量を有し、流組織の要として重責を果たしていた人物なのである。

#### 各派家元出演の演奏会

北海道はまた各流派にとって、新しく勢力を拡大できる可能性のある重要な地域だった。その証拠に、交通の不便を押し、各派の家元がはるばる北海道における演奏会に出演するため来道している。

大正11年夏から昭和4年までの8年間に於ける各派家元の演奏会出演のための来道回数を調べてみると表5のようになる。最も多いのは琴古流鈴慕会の会主である青木鈴慕で5回となっている。これは青木鈴慕が関東大震災後、約1年間札幌に移り住んで音楽活動を展開した強みであろう。

次に多いのが都山流宗家中尾都山の3回である。都山流は尺八界最大の、全国規模を誇っていたから、全国各地からの宗家巡演を希望する声が多く、北海道の3回は、いかに中尾都山が北海道を重要視していたかを示している。

ではいかと推測できるが、記録が無いので明言できない。

ここで特徴的なことは、各派の家元たちが道東を除いて、道内の主要都市をバランス良く回っていることである。南から挙げると函館・室蘭・小樽・札幌・旭川となっている。

今では東京からプロの演奏家が来て演奏会をするとなると、どうしても札幌に集中してしまふ。そういう意味では60数年前の方が、道内における文化面での都市バランスが保たれていると言えるのではないだろうか。

表4 東京公演への参加状況

	催 事 名	場 所	主 催	道内からの出演者
昭2/5/1	第9回童窓会演奏会	明治神宮外苑日本青年館	荒木古童	長谷川羊童(函)
昭2/10/9	第10回童窓会演奏会	数寄屋橋東京朝日新聞社	荒木古童	長谷川羊童(函)
昭3/4/1	鈴慕会20周年記念演奏会	東京帝国ホテル演芸場	青木鈴慕	藤沢鈴昭(札)
昭3/10/21	第12回童窓会演奏会	明治神宮外苑日本青年館	荒木古童	長谷川羊童(函)
昭4/4/3	第1回鈴慕会師範演奏会	東京丸の内保険協会	青木鈴慕	藤沢鈴昭、橋本鈴法(札)
昭4/5/18	第13回童窓会演奏会	東京丸の内朝日新聞社	荒木古童	長谷川羊童(函)

表5 各派家元出演の演奏会

年月日	出演家元	主 催	会 場
大11/8/12	荒木古童	童窓会	函館市公会堂
12/4/14	川瀬順輔	鶴声会	函館市公会堂
12/4/15	〃	籥鳴会	小樽市クラブ
12/7/7	中尾都山	流本部	函館市公会堂
12/7/9	〃	〃	小樽市クラブ
12/7/11	〃	〃	室蘭劇場
12/7/13	〃	〃	夕張鹿谷社員集會場
12/7/15	〃	〃	札幌市太平館
12/7/16	〃	〃	旭川市市村
13/6/22	青木鈴慕	鈴慕会	旭川市第2神田館
14/7/11	上田芳懂	美登里会	札幌劇場
14/9/6	青木鈴慕	鈴慕会	太平館
昭元5/22	川瀬順輔	玉声会	豊平館
元5/26	〃	〃	旭川商業会議所
元8/14	河本逸童	三曲同好会	〃
元9/5	青木鈴慕	鈴慕会	時計台
2/6/21	〃	〃	札幌市今井記念館
2/10/14	吉田晴風	籥風会	小樽市クラブ
2/10/16	〃	〃	札幌市今井記念館
2/10/18	〃	三曲会	旭川ミヤコ館
3/6/23	中尾都山	流本部	札幌市公会堂
3/8/4	荒木古童	童窓会	函館市公会堂
3/9/29	青木鈴慕	鈴慕会	札幌市公会堂
3/9/30	〃	〃	小樽市クラブ
4/7/6	中尾都山	竹霊会	函館錦輝館
4/8/28	井上重美	〃	旭川商業会議所
4/9/28	青木鈴慕	鈴慕会	札幌錦輝館

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽<琴・三絃>の店

# 川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎代221-4970

■営業時間/午前10時~午後7時/月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

# 北海道鈴慕会の発展

## 中島聖山

北海道を舞台にして、夢を胸に描いて活躍した先人たちの足跡をたどってきたが、今回は第1回目に取り上げた琴古流鈴慕会のその後の発展の様子に触れてみることにする。

今回記述した内容のうち、青山鈴翠に関するものは富良野市在住の田村憲山氏から提供された資料によるものであり、伊藤鈴島氏に関するところは、本人との面談によりお聞きいただいた貴重なお話を元にまとめたものである。

お二人に誌面を借り、心からお礼申し上げます。

### 青木仁峰の他界

本誌第9号の尺八篇その1では、鈴慕会の黎明から基盤の確立までと題して、初代青木鈴慕の来札から昭和4年秋までを、藤沢鈴昭の活躍を中心に記述した。

そこで、今回は続く昭和5年以降約10年間に焦点を当て、鈴慕会の発展の様子をたどってみることにする。

昭和5年は鈴慕会にとって不幸な年であった。というのは、4月11日に初代鈴慕の父である青木仁峰が83歳で他界したからである。誠造から鈴慕を襲名して3年、幹部6名を柱に組織の充実強化に力を入れようとしていた矢先だっただけに、尺八の師でもあった父を亡くしたことは、鈴慕にとって単に肉親を亡くした悲しみにとどまらず、大きな苦しみであっただろう。

### 小谷鈴峰の活躍

北海道鈴慕会の双璧として藤沢鈴昭とともに活躍が期待されていた鈴木鈴峯が師範昇格も空しく昭和2年6月12日に病死したが、その大きな穴を埋めたのが鈴峯の高弟である小谷鈴峰であった。

小谷は昭和4年の春師範を許されて、それまでの洲峰から鈴峰と改名した。国鉄の職員だった小谷鈴峰は、同じ職場の尺八愛好家を集め、鉄道倶楽部を会場に活発な音楽活動を展開した。稽古熱心だった彼は、社宅では迷惑な存在だったのか、昭和5年から6年にかけて南9条西1丁目へ、北4条11丁目へ、そして南6条西8丁目へと3度移転している。そして、ついに土蔵のある家を見つけ、時間ある限り土蔵の中で尺八を吹きつづけたと言われている。こうした猛練習の末、小谷鈴峰は大甲の「レ」をマスターしたのだとも言われている。

鈴慕会関連の演奏会を昭和5年から拾い上げてみたが、そのほとんどに小谷鈴峰の名を見つけることが出来る。こうして小谷鈴峰は亡き恩師の遺志を継ぎ、鈴慕会を支える立派な演奏家として活躍した。

### 故鈴木鈴峯追善演奏会

鈴木鈴峯が亡くなって5年目を迎えたお正月命日の昭和7年6月12日に、今井記念館において、故鈴木鈴峯追善の演奏会が開催され

た。会には藤沢鈴昭はじめ小谷鈴峰など北海道鈴慕会のメンバーと糸方には新田佐美治、佐美代、横山光喜勢、橋本賀寿井などが出演したが、遺族を代表し、当時国鉄苗穂工場の事務主任をしていた、鈴峰の実兄である鈴木千太郎氏が舞台に出て謝辞を述べた。

続いて同年9月23日には、東京から宗家青木鈴慕を招聘して、札幌市公会堂で鈴慕会創立20周年記念の演奏会が開催された。これに先立ち数日前から札幌入りしていた青木鈴慕は、NHK札幌放送局で本曲「月の曲」を録音した。この録音は演奏会の前日に当たる9月22日の午後0時5分からローカル放送として全道に放送された。この日は青木鈴慕の「月の曲」の他に、筆本手・島田照子、菅原富貴子、小玉園江、筆替手・竹森八重子、尺八・竹森鈴峰で「秋の言の葉」が放送された。

### 若手活動家の輩出

藤沢鈴昭を頂点として橋本鈴法、小谷鈴峰らによって支えられていた鈴慕会の活動は、相次ぐ若手活動家の輩出によって、さらに強固なものへと発展していった。

昭和7年秋には、小谷鈴峰門人の南田薫峯や森田欽峯宅を鈴慕会支部と位置づけ、門人育成の拠点としたため、2人の芸道精進に拍車をかけることとなり、昭和12年3月には森田欽峯が鈴雨の鈴号を取得することとなった。また、昭和8年秋には藤沢鈴昭門人の丹野鈴童と鈴木鈴峯門人の竹内鈴欽が師範に昇格

した。そして、同年11月11日には札幌市公会堂において、2人の師範昇格披露演奏会が、地元糸方の賛助出演を得て盛大に開催された。こうした札幌を中心とする鈴慕会の若手活動家の輩出に相まって、小樽では尾山鈴童が竹鈴会を組織し活動の母体とするともに、岩見沢へも進出して広範囲な活動を展開していた。

更には青木鈴慕直門の小倉鈴波が、昭和9年9月に青函連絡船の機関長として就任し、函館市杉並町に居を構えたことにより、それまで未開の地だった道南の都に鈴慕会の拠点が生まれることとなった。

### 藤沢鈴昭の受賞

現在では古曲の琴古流、新曲・現代曲の都山流というのが定説になっているが、当時の演奏活動の内容を調べてみると、そうでないことに驚かされる。鈴慕会の代表であった藤沢鈴昭は積極的に新曲に取り組み、自ら宮城新曲を演奏していた。

昭和7年6月にNHK札幌放送局では3回の邦楽番組を制作し放送しているが、9日と23日を担当した都山流は「茶の湯音頭」「新娘道成寺」「夜々の星」「磯千鳥」と古曲ばかり放送したのに対し、琴古流の藤沢鈴昭は1日に新日本音楽と題して宮城道雄作曲の「ひばり」や「春の夜」を筆・横山光喜勢、吉井光井、増田佐喜井、大野由喜井で放送し、福田蘭童作曲の「旅人の唄」を独奏している。

現在でも新曲の琴古譜での出版が思うように行われていない状況から推測すると、60年も前にこうして琴古流の尺八家が新曲に取り組むためには、想像を絶する努力が必要だったに違いない。

藤沢鈴昭はまた、三曲協会の組織されていなかった当時の札幌の邦楽界にあって、全体をまとめる要としての役割も果たしていた。昭和11年5月2日には、今井記念館において故新田佐美治師の追悼演奏会が開催されたが、

これは藤沢鈴昭が札幌で活躍する各流派に声を掛けて実現に導いたもので、尺八界からは都山流の畑中康山や琴古流重門会の高橋渉童などが揃って出演している。

こうした藤沢鈴昭の活躍は、単に邦楽界にとどまらず、広く札幌市民の評価を受けていた。その証拠に昭和12年2月11日の建国祭式典で、藤沢鈴昭は永年の音楽功労者として橋本札幌市長より邦楽関係者では初めて、特別の表彰を受けたのである。

藤沢鈴昭は樺太にまで足を伸ばし、鈴慕会の勢力拡大に尽力した。昭和13年5月29日午後4時から樺太豊原市の樺太劇場で開催された、中館豊輝師の開軒披露曲演奏会に、佐藤岡豊師と同行し出演している。また、同年7月10日から8月中旬までの約1か月間、樺太各地を回って講習会を開催し、流人の育成に尽力した。

**軍事慰問等演奏会の開催**

戦争の色が濃くなってくるに従って、三曲界にも戦争の波が押し寄せてきたのである。昭和13年2月13日には、藤沢鈴昭は糸方の佐藤岡豊師とともに、札幌の陸軍病院で陸軍病院慰問演奏会を実施した。

また、同年4月9日には札幌の三曲界の諸師と協力し、札幌市公会堂で軍事献金舞踊及び邦楽の会を開催して、会券の売上金六二〇円四〇銭を愛国婦人会を通じて軍事献金した。

**青山鈴翠の活躍**

美唄を中心に中空知地方で活躍した青山鈴翠は、明治39年10月26日に秋田県鹿角郡錦木村で青山文太郎とヨネの次男として生まれた。本名を勝郎といい、大正15年に函館師範学校を卒業し、美唄市内の小・中学校に奉職した。そして、昭和6年頃尺八音楽の魅力に引かれて、藤沢鈴昭に琴古流尺八の手ほどきを受けたのである。しかし、藤沢鈴昭が多忙だったと見え、その後は小谷鈴峰に師事して研鑽を積んだ。青山鈴翠が吹いていた8寸管は高橋渉童が作ったもので、当時一二〇円もしたという銘管である。歌口の所が9分もある太い

竹であるが、肉の厚い姿形の整った立派な尺八である。

芸熱心だった青山鈴翠は学校の夏休みを利用し、昭和12年頃から毎年上京し、東京三田の宗家青木鈴慕宅を訪れ、約1か月間住み込



青山鈴翠師

みで尺八の修行を重ねた。間もない三男の静夫氏（現在の青木鈴慕）を膝の上に抱いてお守り等もしたという。

こうした青山氏の努力により、昭和13年5月には皆伝免許を取得して鈴翠と号したのである。また、昭和16年12月には師範に昇格し、道央鈴慕会の責任者に就任して、組織の発展強化に尽力した。しかし、戦争の嵐は社会生活の基盤そのものを覆したため、門人の育成や演奏活動などは低調にならざるをえなかった。

**藤沢鈴昭の後を継ぐ伊藤鈴鳥の出現**

現在北海道鈴慕会の会長を務める伊藤鈴鳥は、明治39年10月17日に生まれた。国鉄に勤務する傍ら管楽器が好きで笛やハーモニカを

吹いていた。しかし、内心では老後のことも考え、生涯続けられる楽器を手掛けてみたいと望んでいた。そんな時、義兄（夫人の兄）から初代鈴慕作の8寸管一本を渡されたのである。伊藤夫人には2人の兄があり、長兄は藤沢鈴昭の門人として既に尺八を吹いていた。次兄はビオラやフルートを演奏し、洋楽に取り組んでいた。しかし、こうして義兄から尺八を譲り受けたにもかかわらず、良き指導者と出会うこと無く時間がたっていた。

当時、伊藤氏は札幌駅の貨物係で、2人一組の仕事をしていた。ある日のこと、仲間の重永善友が「今日は早く帰してくれ」と言うことから、彼が尺八の稽古に通っていることがわかったのである。尺八を持ちながら指導者との出会いを待っていた伊藤氏は、すぐ

**鈴慕会関連演奏会一覧表**

年月日	会場	催事名	主な出演者
昭5・1・18	鉄道クラブ	札鉄春季邦楽会	小谷鈴峰・安部登吉・三浦西雄ほか
2・2	今井記念館	北大鈴韻会演奏会	藤沢鈴昭・橋本鈴法・小谷鈴峰ほか
7・6	小樽クラブ	竹鈴会7周年記念演奏会	尾山鈴童・安東紫明・戸田・肥田ほか
9・27	鉄道クラブ	鈴慕会演奏会	藤沢鈴昭・小谷鈴峰・橋本鈴法・竹森ほか
10・3	〃	〃	藤沢鈴昭・小谷鈴峰・橋本鈴法ほか
11・14	岩見沢空知会館	竹鈴会演奏会	尾山鈴童・村中鈴星ほか
11・22	小樽クラブ	〃	尾山鈴童ほか
11・16	鉄道クラブ	札幌琴古会演奏会	小谷鈴峰・竹内・森田・南田・斉藤・遠藤操琴ほか
9・23	札幌市公会堂	鈴慕会演奏会	青木鈴慕・藤沢鈴昭ほか
8・6・10	今井記念館	〃	藤沢鈴昭ほか
11・11	札幌市公会堂	〃	藤沢鈴昭・橋本鈴法・小谷鈴峰ほか
昭9・9・29	中島公園西の宮	〃	藤沢鈴昭・橋本鈴法・丹野鈴童ほか
昭10・9・21	札商ホール	〃	藤沢鈴昭ほか
昭11・1・18	豊平館	邦楽演奏会	藤沢鈴昭・渡辺賀寿井ほか
5・2	今井記念館	故新田佐美治追悼演奏会	藤沢鈴昭・畑中康山・高橋渉童・横山ほか
11・7	〃	鈴慕会演奏会	藤沢鈴昭ほか
昭12・8・10	札商ホール	歓迎三曲演奏会	青木鈴慕・中能鳥欣一夫妻・藤沢鈴昭ほか
8・12	函館東部事務所	青木中能鳥夫妻歓迎演奏会	青木鈴慕・中能鳥欣一夫妻・小倉鈴波・窪田敏子ほか
昭13・2・13	札幌陸軍病院	陸軍病院慰問演奏会	藤沢鈴昭・佐藤岡豊ほか
4・9	札幌市公会堂	軍事献金舞踊及び邦楽会	藤沢鈴昭・佐藤岡豊・橋本賀寿井・志村ほか
昭14・7・1	今井記念館	鈴慕会演奏会	藤沢鈴昭ほか
昭16・6・26	月寒陸軍病院	陸軍病院慰問演奏会	藤沢鈴昭・佐藤岡豊ほか
11・8	鉄道クラブ	鈴慕会演奏会	藤沢鈴昭ほか

さま」それでは私も一緒に連れて行ってほしい」と願いだした。ときに昭和6年9月23日のことであった。

こうして訪ねたところが、故鈴木鈴峯門人の木村鈴露の家だったのである。当時木村はまだ師範免許を取得しておらず昭韻と名乗っていた。

伊藤氏を尺八界へと導いた職場の同僚である重永は奥伝免許を取得し鈴嶋と号したが、残念ながら途中で止めてしまった。

木村鈴露がまだ師範でなかったことや、伊藤氏が仕事の関係上上京する機会が多かったことなどから、伊藤氏は木村鈴露の紹介で昭和8年の夏、東京成子坂下にある青木鈴慕宅を訪ねた。こうして伊藤はその後機会あるごとに直接青木鈴慕から指導を受けることとなったのである。

伊藤氏が初めて手にした鈴慕作の8寸管は、その後倶知安の佐藤吉永(鈴照)に譲ってしまったという。そして、昭和8年に高橋渉童が制管した8寸管を一〇〇円で購入し、現在でも吹き続けている。揺りをきかせた子の甲音は聴く者の心を打つものがある。私などは当時精華堂の竹を吹いていたからチが高く、どうしても伊藤氏のチの甲音に引かれて、楽屋で一緒にになると横でじっと聴いていたものである。

かねてから、伊藤氏は北大工学部で高部屋福平教授の助手をしていた島田氏が吹いていた渉童作の8寸管が欲しかった。ある日、伊藤氏が高橋渉童宅を訪ね、この事を伝えると渉童氏は「あれは自分が吹くからダメだ」といって、島田氏からその尺八を取り上げ改作してしまった。この竹は現在工藤鳳童氏の所に保管されているとのこと。そのかわり、渉童氏は伊藤氏のために滋賀県から竹材を取り寄せ、新たに8寸管を作ってくれた。中継ぎの所で一つの節を調整して作ったもので、今ではアメ色になっているが、当時は真っ青だったそうである。

渉童氏はその竹を伊藤氏に渡すとき「一五〇円を切ったら売るな」と伝言し、一〇〇円で売ってくれたとのこと。しかし、木村鈴露

がこの竹を見て、歌口が下がっていると聞いたことから、別に演奏には支障なかったが伊藤氏は気にしていたらしい。それで青木道雄氏が来道した際に見てもらい、直せとも言われなかったが、気になって青木氏に頼んで歌口を上げてもらったところ、以前の鳴りが消えてしまったとのこと。その後、苦勞して吹いていたものを、尾崎沢山氏が来札したのを機会に直してもらって良くなった、と話していた。

大正15年の正月、上京した際、伊藤氏は例によって成子坂下の青木鈴慕宅を訪ねた。東京は大相撲初場所が賑わっていた。その時鈴慕は伊藤氏に向かって「君、免状をやるぞ」と呟いた。「私はまだ免状というものをもらったことがありませんが」と初伝か中伝でもくれるのかと思つて伊藤氏が答えると、「師範の免状をやる」と言われたのでビックリ。「とてもいっぺんに師範とは」と、その場は断つて帰札したらしいが、秋になって藤沢鈴昭氏を仲介し再度の勧めがあり、11月3日付

で師範となり、鈴嶋を名乗って教授所を開いた。当時のお金で一〇〇円を免許代として支払ったそうである。

そして、翌昭和2年正月に、藤沢鈴昭宅で新春にふさわしく師範披露の演奏を行ったのである。

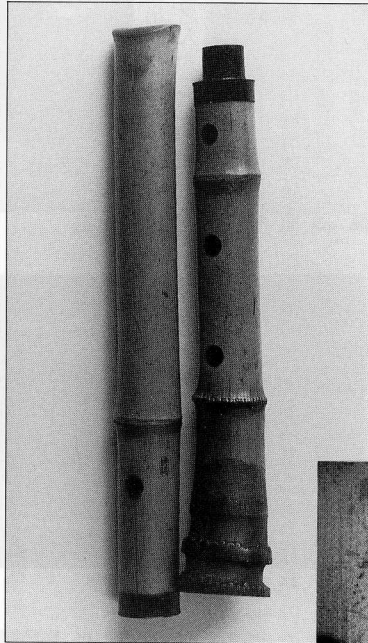
初めての門人は、留辺薬町の松合鈴尚である。札幌鉄道管理局の労働課長をしていた伊藤鈴鳥のところに、小谷鈴峰が訪ねてきて、留辺薬へ行ってくれないかと、松谷氏の教授を依頼したことが事の始まりである。その後、

伊藤鈴鳥は札幌からはるばる留辺薬まで毎月出張教授に出掛けることとなり、約1年間続けたのである。

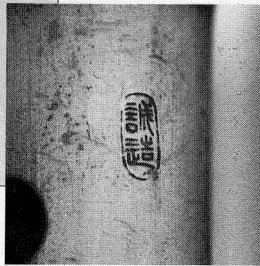
その伊藤鈴鳥氏は平成5年度地域文化功労者表彰を受けることとなり、11月5日東京千代田区にある如水会館のオリオンルームで、作家の高橋揆一郎氏とともに、北海道代表として全国81名11団体の1人として赤松文部大臣から表彰状と記念の木盃を受け取った。金のふく輪で縁取られた木盃の中央には七・五の桐の紋が金粉で描かれていた。



伊藤鈴鳥師

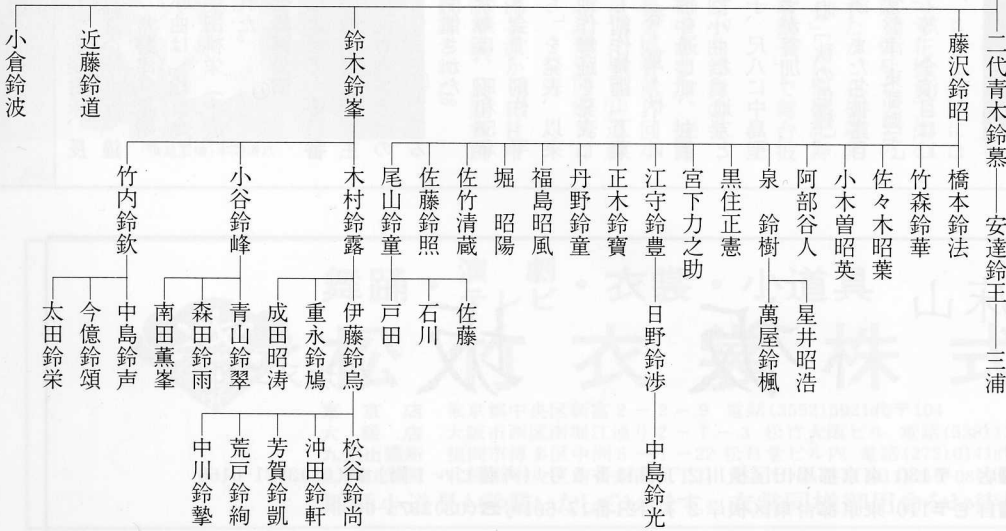


青木誠造作の青山鈴翠師の愛管



誠造焼印

北海道鈴慕会系譜  
二代青木鈴慕



# 伝統芸能「北海道」のあゆみ

## 尺八篇その13

### 草分けとしての竹友社

中島聖山

琴古流竹友社のことに關しては、既に第5回目と第6回目に、室蘭の女流尺八家で後に綜楽流を創始した佐藤富士江と、世界的な昆虫学者で尺八博士の異名を取った札幌農学校教授の松村松年に焦点を当てながら、宗家竹友社の師範名簿に載らなかった影の人材的存在だった二人が、いかに中央の尺八界から高い評価と期待を掛けられ、大きな影響力を持って活躍していたかを述べた。

そこで、今回は宗家竹友社の組織内において、流勢拡大に尽力を注ぎ、創成期に大きく貢献した道内在任の師匠たちの活躍ぶりを辿ってみることにする。

#### 阿部凶介の活躍

函館を中心に道南地方で活躍した阿部凶介は、明治30年10月13日に新潟市で生まれた。社会人になって仕事にも慣れてきたのを機に、大正5年から同市で教授所を開いていた三上精一に入門し、尺八の手ほどきを受けた。専門師匠の夢を抱いていた阿部凶介は、プロの指導を受けたと考え、大正11年に宗家竹友社の川瀬順輔に転門した。川瀬順輔に師事してからは芸道に拍車がかかり、仕事についていたものの半プロとして活躍した。



川瀬順輔

函館には川瀬順輔に転門した直後の大正11、12年に赴任してきたものと思われる。次第に古典本曲にひかれた阿部凶介は、津軽海峡を渡って津島孤松の門を叩き、錦風流根笹派の曲を学んだ。

錦風流根笹派はコミ吹きを特徴とし、津軽藩王の命を受けた吉崎八弥好道一風が、群馬県沼田市の田宝寺住職・栗原栄之助錦風に教えを受け、津軽藩に戻って藩王靈親や伴勇蔵建之らに伝授したことに始まる。阿部凶介が師事した津島孤松は伴勇蔵建之の直弟子だった。

こうして津島から錦風流根笹派の全曲を学んだ阿部凶介は、同好会を組織して古典本曲の保存普及にも力を注いだ。阿部凶介は仕事の関係で戦後一時盛岡に住んだことがあるが、昭和29年に盛岡の財務部長で退官した後、再び函館に戻り函館信用金庫の常務理事として第2の人生をスタートした。アマに徹し、多くの門下生を育てて世に出したが、主だった人としては柏倉彰堂、佐々木栄堂、大地正堂、進藤吉郎、金谷礼香、東吾妻などがある。

#### 斉藤玉洞の来札

大正末期の宗家竹友社で道内唯一の専門師匠だった斉藤玉洞は、阿部凶介と同様新潟の人で本名を泉といた。鉄道官吏だった斉藤玉洞は、会津若松市に住んでいたころ、毎週土曜日の仕事を終えてから上京し、藤田鈴朗に入門して尺八を学んだ。藤田は美妙社を設立し、雑誌「三曲」をはじめ出版事業に手を

出していた。事業のほうは忙しくなったのであろう、藤田が社中を解散した後は、川瀬に転門し、大正7年から新潟市で専門師匠として

ての道を歩みはじめた。

専門師匠として大成することを望んでいた彼は、新潟での教授に満足せず、大きな夢を描いて札幌に転居し、道内での活動を開始したのである。時に大正14年9月のことである。翌大正15年9月25日には、岩見沢市の空知会館で斉藤玉洞師の歓迎演奏会が開催された。斉藤玉洞は玉声会を組織し、多くの門人を育成するとともに、道内各地に玉声会支部を設置して活動の母体とした。

しかし、残念なことに道内での活動は短く、昭和7年頃までにとどまった。その後はまた会津若松市に戻り活動を続け、晩年は新潟県津川町に居を構えて余生を送った。昭和10年10月4日新潟県津川の自宅で、長い尺八人生にピリオドを打ち永眠した。

#### 全道主要都市を結んだ師匠網

琴古流鈴巻会や都山流・上田流に比べ、竹友社が一番早く全道の師匠網を構築し、活動の母体を完成させた。大正14年9月に新潟から斉藤玉洞が専門師匠として、札幌に転居してきたことによって、そのネットワークは一層強化され、普遍のものとなった。

大正14年10月現在の師匠名簿には、函館の阿部凶介、小樽の大泉正一をはじめ池畑初三郎や尾山紫菫、札幌には道内唯一の専門師匠である斉藤玉洞と阿部登吉、旭川の阪口實と三浦信三郎、夕張の稲村光三郎、網走の井上正夫、稚内の斉藤信一など総勢11名が列記されている。

このように道南、道央、道東、道北とくまなく全道をネットした特志師匠網は、札幌の専門師範である斉藤玉洞によって束ねられ、一丸となった活動母体として組織化されることになったのである。

#### 門人育成競争の始まり

宗家竹友社の全国組織が整備されて行くに従って、各社中が競い合っ

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

## 川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日  
●各種カードをご利用下さい。

社中規模の拡大に努めた。

大正14年から昭和6年にかけて、道内在住の師匠が申請した免許状の数をまとめてみると表のようになる。6年間で申請した免許状は実に149件で、最も多いのが斉藤玉洞の52件、次いで函館の阿部凶介が41件である。炭鉱の繁栄を裏付けるかのように夕張の稲村光三郎も21件で上位3人に入っている。不振なのは旭川で、2人の特志師範がいながら6年間で1件である。

階級としては初伝が最も多く92件で、全体の61%を占めている。次いで中伝の32件、奥伝の21件となっている。毎年25件余りの免許状を申請していたのであり、活気溢れる状況であった。

### 各社中単位で会結成

門人の数が増えてくると、音楽活動の母体となる会が自然発生的に組織されはじめた。函館の阿部凶介が組織した鶴声会は、社中の演奏会や講習会の開催母体となって、道南の尺八界を常にリードしていた。

また、大正12年春に統家から大泉家へ婿養子に入った大泉正一は、小樽への転居を機に鹿鳴会を結成して活発な音楽活動を展開しはじめた。資料の裏付けがないので明言は出来ないが、室蘭の統治郎と血縁関係にあったのではないだろうか。同じく小樽の尾山紫童は

竹鈴会を組織して、岩見沢にも進出し、広範な活動を展開した。札幌の斉藤玉洞は来札と同時に玉声会を組織し、盛んな演奏活動を繰り広げた。

川瀬順輔の直門で昭和4年春に管林署職員として常呂郡置戸村に転居してきた時谷高陽は、本名を繁蔵といい、網走の井上正夫と協力して門人の育成に当たり、多くの門人を育てて道東の竹友会充実の一翼を担った。

### 斉藤と阿部の二人三脚

琴古流竹友社が短期間に飛躍的な発展を遂げた理由の一つとして、斉藤玉洞と阿部凶介の強い協力関係をあげることができる。

大正14年9月に斉藤玉洞が新潟より、竹友社唯一の専門師匠として来札したときには、既に全道の特志師範たちの陣容は固まっていたし、都山流の畑中康山や上田流の青山呂僮のように、地元で専門師匠を派遣してほしいという強い要請に基づいて来道したのでもなかった。往々にしてこういう場合は、先に活動していた師匠たちとの折り合いがうまく行かず、互いに反目しあって組織の弱体化を生ずるものである。しかし竹友社の場合、後から入ってきた形となった斉藤玉洞を中心に、全道の師匠たちが協力関係を深め、組織強化の方向へと邁進した。それはとりもなおさず道内で一番の影響を持っていた阿部凶介の

度量の大きさによるものである。斉藤玉洞の来札を歓迎し、昭和2年8月27日に岩見沢の第二大正座で「斉藤玉洞歓迎演奏会」を開催した際、阿部凶介も遙々函館から参加したのである。

推論の域を出ないが、斉藤玉洞と阿部凶介は共に新潟出身であり、同郷のよしみとして互いに心を許しあう仲だったのである。

### 玉声会の飛躍的發展

大正14年9月に札幌へ転居して本格的な教授を開始した斉藤玉洞であるが、勢力拡大の速さには驚嘆せざるをえない。昭和2年8月の雑誌「三曲」に掲載された玉声会の暑中見舞い広告を見ると、札幌市北3条西3丁目の斉藤玉洞の自宅に本部を置き、新潟・秋田・会津若松など6か所に支部を開設している。北海道では岩見沢の許勢芳洞が唯一の支部として名を連ねている。

### 暑中御見舞

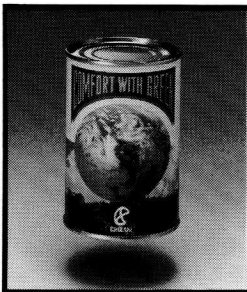
札幌市北三條西三丁目 玉声會本部 會長 齊藤玉洞	
支	小 林 奎 洞
支	濱 本 晃 洞
支	石 山 秀 洞
支	酒 井 玲 洞
支	入 江 静 洞
支	佐 久 間 竹 洞
支	佐 伯 鳴 洞
支	許 勢 芳 洞
部	

道外の5か所については、斉藤玉洞が来札以前に既に教授所としていた所か、指南の免許を与えて教授を許していた門人のところと思われる。従ってこの時点では、来札して2年あまりで開拓したところと言えは、札幌のほかでは岩見沢だけということになる。

しかし、この2年間で斉藤玉洞は専門家としての将来の見通しをたて、内地に残してきた門人たちをも包括する玉声会の組織化を決定するに至ったのである。その手始めとして昭和2年4月22日に札幌の円山公会堂で、道

大正14年から昭和6年までの免許申請状況

都市	申請師匠	初伝	中伝	奥伝	皆伝	特志師範	合計
函館	阿部 凶介	23	10	7		1	41
小樽	池畑初三郎						
	尾山 紫童	1			3	4	
	大泉 正一	7	1	1			9
札幌	齊藤 玉洞	36	7	9			52
	阿部 登吉						
旭川	阪口 實						
	三浦信三郎			1			1
夕張	稲村光三郎	10	10	1			21
網走	井上 正夫	6	4	2			12
稚内	齊藤 信一	9					9
合 計		92	32	21	3	1	149



# 45億年分の1。

推定年令、45億年。  
 壮大ないくつもの変遷を重ねてきた地球に、  
 私たちは今年1年どれくらい思い入れできるだろう。  
 少しずつ、着実に、地球の生命と人間の関係を親しくしたい。  
 1991年、創業100周年——地球を、人間を、  
 未来を見つめた共生空間の創造を続けながら、  
 私たち地崎工業は次の時代へ歩みます。



考えたいのは、地球の未来です。  
 株式会社地崎工業



内の竹友社で最大の勢力を有していた阿部凶介を招聘し、組織化を祝う記念の演奏会を開催したのである。この「玉声会支部発会記念演奏会」の開催によって、齊藤玉洞と阿部凶介の協力関係が生み出されたのではないだろうか。

齊藤玉洞のもう一人の支援者は、札幌農学校教授の松村松年博士である。松村松年は明治中期から尺八を吹いて川瀬順輔夫妻とも親交が深かったし、地元北海道の邦楽界についても精通していた。彼はあくまで趣味として尺八を続けようとしていたので、齊藤玉洞が専門家として生計が成り立つよう、最大限の協力をしたものである。その証拠に齊藤玉洞が来札して最初に開催した演奏会は、大正15年5月22日に豊平館で行った北大八千代会との合同演奏会である。

来札して8ヶ月足らずの齊藤玉洞が、単独で演奏会を開催できるはずがなく、この会には松村松年が会長をしていた北大八千代会の力によるものであろう。時を待たずして北大玉声会が組織されたのも、齊藤玉洞の来札を機に、北大八千代会を発展的に解散した松村松年の取り計らいがあったからではないだろうか。

以上のような協力者たちの支援を受けて、昭和2年正月にわずか1か所だった道内の支部は、2年後の昭和4年正月には8か所に急増している。しかも北大玉声会を始め、帯広・室蘭・北見・釧路・遠軽・今金・栗山とはば全道をネットするまでになったのである。

### 川瀬順輔を招いての演奏会

大正12年4月、竹友社宗家の川瀬順輔は里子夫人と井村豊子を伴って来道した。4月14日には函館市公会堂で川瀬順輔師歓迎の演奏会が開催された。主催は阿部凶介が主宰する鶴声会で、地元糸方として川内佐登治らが賛助出演した。翌4月15日には小樽市倶楽部で同様の川瀬夫妻歓迎演奏会が行われた。主催は大泉正一が主宰する鹿鳴会である。この時札幌では記録に残るような演奏会は行われていないが、恐らく札幌農学校の松村松年らが中心になり、川瀬夫妻を囲んで合奏会を開催したのであろう。

松村松年は早くから北大八千代会を組織して、毎年邦楽の会を開催していた。大正14年秋に齊藤玉洞が来札したのを機に、翌年の大正15年5月22日には北大八千代会と玉声会との連合演奏会を豊平館で開催した。この記念すべき演奏会には、東京から川瀬夫妻と糸方の井村豊子が賛助出演している。川瀬一行は5月17日に東京を出発し、秋田の演奏会に出演後、札幌に向かったのである。この北大八千代会と玉声会との連合演奏会が、宗家竹友社の札幌における最初の公式な演奏会ではなかったか。

川瀬一行は札幌で数日間を過ごし、22日には旭川に向かって地元の三浦信三郎らが主催する歓迎演奏会に出演した。当時旭川には第7師団に勤務する尺八愛好家が多く、川瀬順輔直門の阪口實もその一人で、師団の法務官として働いていた。また、三浦信三郎は旭川の山田流箏曲の草分けとも言える三浦栄洲の夫君で、夫婦そろって三曲の発展に尽力していた。

齊藤玉洞が単独で演奏会を開いたのは、昭和2年2月20日に、太平館で「玉声会尺八演奏会」を開催したのが最初であらう。齊藤玉洞の歓迎演奏会は大正15年9月25日と昭和2年8月27日の2回、いずれも岩見沢で開催されている。最初の会は正しく専門師範の齊藤玉洞の来道を歓迎するものであり、地元の飯田源三郎や許勢芳洞らが中心になって催した内輪の会だった。これに対し昭和2年夏に開催された会には、許勢芳洞の師範昇格と岩見沢支部開設を祝う会を兼ねるものではなかったのだろうか。阿部凶介や玉声会本部付けになっていた小林奎洞らが賛助出演しているからである。

昭和2年10月2日には第2回目の玉声会尺八演奏会が、同じく太平館で開催されている。この会には東京から宮下寛一や草野達二らが賛助出演した。

次第に地元糸方の支持も得られるようになった齊藤玉洞は、昭和3年6月3日に開催した第3回目の演奏会に、初めて中徳校や新田佐美治など地元有力糸方社中の賛助出演を得たのである。

松村松年が統括していた北大八千代会の解散とともに、北大玉声会を組織して学生を掌握した齊藤玉洞は、毎年2月に卒業演奏会を企画実施することにした。昭和4年2月16日午後5時から第1回目の北大玉声会主催の卒業生送別演奏会が今井記念館で開催された。このような北大卒業生のための送別演奏会は、都山流北大康琳会や琴古流北大鈴韻会なども行っていたので、他流を意識したものだったのかもしれない。

昭和4年3月2日に鉄道倶楽部で開催された札幌玉声会の春季演奏会では、土曜日の夜にもかかわらず、会場となった鉄道倶楽部の2階ホールは満席の状態だった。糸方には中徳鳳琴、江釣子美世井、杵屋栄喜音、秋田智代などの賛助出演を得て、本曲「秋田菅垣」「真虚鈴」「箏曲」「新高砂」「千鳥の曲」「近江八景」「磯千鳥」「末の契」、長唄「小鍛冶」「吾妻八景」など12番を演奏した。

### 昭和4年正月現在の玉声会支部

北海道帝大玉声会代表	稲本 陽洞	秋田県大曲町	山本 玉弘
新潟市西港町	高橋 悦洞	秋田県毛馬内町	立山 廉吉
新潟市古町	小崎 蓉洞	北海道帯広町	浜本 晃洞
新潟県長岡市本町	渡辺 松洞	室蘭市母恋町	許勢 芳洞
新潟県刈羽郡鯨波	石山 秀洞	野付牛町	織田 鈴洞
新潟県中魚沼郡十日町	入江 静洞	釧路市西弊舞	佐藤茂十郎
福島県若松市駅前	早津 昌洞	遠軽町	長谷川豊洞
秋田市	保坂 玉風	今金町	前原 玉昌
	佐久間竹洞	栗山町	長尾 玉秋
	佐伯 鳴洞		



日本舞踊のお写真なら (ポーズ、舞台)

# 藤本写真館

(各地出張撮影も致します)

<スタジオ> 札幌市豊平区平岸4条4丁目 4-10 TEL821-3515 ●駐車場あります。

# 上田流を支えた

## 美登里会と竹壮会

### 中島 聖山

上田流に関しては、既に本誌十五号と十六号で創成期と全道への展開の様子について触れたが、その後の調査や資料提供等により、一部記述内容を補足訂正しなければならなくなった。特に青山呂憧の来道のいささつや謎の人とされていた久慈寛道の活躍ぶりについて追記したい。

今回の記述に当たっては、函館の木島偉童氏にご協力を頂きました。誌上をもってお礼申し上げます。

#### 青山呂憧の来道

北海道の上田流にとって産みの親とも言える青山呂憧は、本名を梢吉といい、新潟県の出身で、明治四十二年に海軍に入り、大正十年十月の退官まで十二年間業務に当たっていた人である。崇高な芸術論と質素ながら凛々しさを感ぜさせる身なり等、彼を強く印象づける威厳のゆえんは、軍隊のなかでも最も厳しいと言われていた海軍に籍を置いた、長い軍人生活によるものであろう。退官後、芸術の道を求めた青山呂憧は、上田芳憧の内弟子となり、「無我一念」に象徴される上田流尺八道に身を投じた。内弟子となつてわずか一年半しか経っていない大正十二年春、青山呂憧は宗家上田芳憧の命を受けて、家元代理として北海道

へ旅立つこととなった。時に大正十二年四月五日のことである。長い汽車の旅を終え、札幌の街には大正十二年四月十七日に降り立った。

札幌駅には師匠派遣を願ひ出た札幌農学校(現北海道大学)の学生・佐伯才一が、待望の本部派遣師匠を迎え入れたであろうが、宗家の内弟子として修業に励んだとはいえず、一年半では芸の上でも未完であつたろうし、不案内な北の地に降り立つた青山呂憧の胸中はどうなであつたろうか。

佐伯才一の世話によるものであろう、青山呂憧は間もなく札幌の中心である南四条西六丁目(現南条)に居を構え、尺八教授を開始したのである。

内弟子の期間が短かつたことから、大阪での修業中には指南の資格を持たず、北海道への派遣辞令とともに准師範・飛龍軒青山呂憧となり開軒を許されたのではないだ



青山呂憧

ろうか。その証拠に来札二ヶ月後の大正十二年六月九日には、大平館で渡道開軒披露の演奏会を開催している。

#### 辞令

命 飛龍軒 青山呂憧  
任 家元代理

大正十二年四月五日

家元 臥龍齋 上田芳憧

青山呂憧に対する北海道派遣辞令

また、北海道での尺八教授が一日も早く軌道に乗り、上田流の流勢に大きく貢献できる日の来るのを祈願して、翌大正十三年正月には札幌神社(今の北海道神宮)で献奏を行っている。この献奏はその後も毎年継続実施され今日に至っている。更には大正十三年十一月六日に、南三条西一丁目の帝国館で来道一周年記念の演奏会を開催し、北海道永住の第一歩を記した。

#### 美登里会の隆盛

青山呂憧は、昭和三年四月十七日で渡道満五周年を迎えたが、その間に彼に尺八教授を願ひ出て入門したものは二百三十三名におよび、内初伝免許状を取った者は百二十五名、中伝四十六名、奥伝二十三名、指南十六名、皆伝八名、准師範二名と短期間に隆盛を極めたのである。

門人の増加とともに組織も強化され、理事・幹事・幹部などが置かれ、支部も道内始め台湾・樺太にまで及んだ。また昭和三年四月には、大阪から家元上田芳憧と補佐役の上田竹童を招聘し、札幌市公会堂で渡道五周年記念演奏会を開催した。

美登里会支部組織(昭和四年現在)

本	部	札幌(札幌市南四条西六丁目)
	道内	釧路・帯広・幾春別・江別・追分・倶知安・野付牛・琴似・月寒・夕張・小樽・旭川・函館・紋別・羽幌
支部	道外	新潟・福島
	その他	台湾・樺太

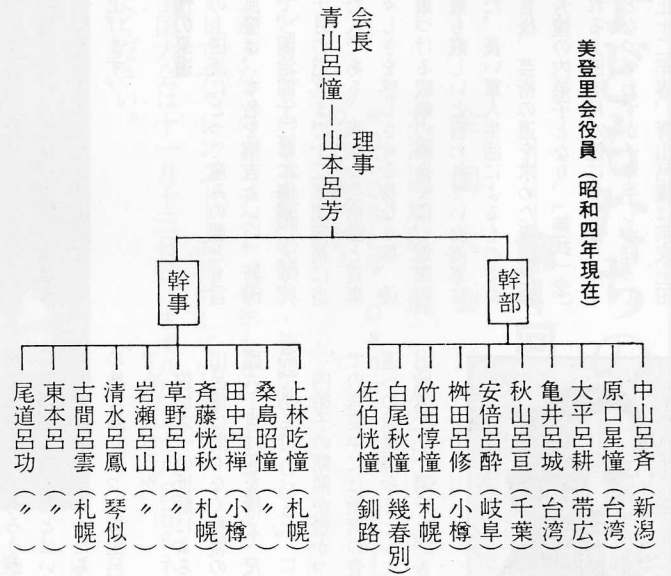
#### 木島偉童が深川で入門

木島偉童は本名を長作といい、昭和二年八月二十日に深川で生まれた。昭和十七年に当時の国鉄深川駅に就職した彼は、カルタを趣味とし、常に会場となる上田旅館に通っていた。

あるカルタ会の例会のとき、いつものように上田旅館を訪れてみると民謡の会があり、伴奏として尺八の演奏もあった。なぜかそこで聞いた尺八の音に心引かれたのである。父が民謡を少し習っていたこともあり、家には尺八が何本かあったし、それまでも尺八の音を聞くこともしばしばだった。

しかし、その日上田旅館で聞いた尺八の音は、それまでに聞いたものとは違っていた。その時の印象を同じ職場にいた田畑偉山に打ち明けたことが契機となり、田畑偉

美登里会役員（昭和四年現在）



山に入門し上田流尺八を学ぶことになったのである。ときに昭和二十八年一月のことである。

田畑偉山は久慈寛道の弟子として深川を中心に、多くの門人を育成して活躍していた。先輩たちの中に入って熱心な稽古を続けた木島偉童は、昭和三十一年一月渚滑に転動になるまでに皆伝免許を許され、木島超道と号した。

竹社会の地盤だった道東

渚滑は深川とは違い竹友が少なく、一緒に運営してくれる先輩もなく寂しい毎日だったが、幸い同じ国鉄勤務の林金作氏の細君が箏を弾いていた。山田流を娘時代に少し習った程度だったのか、楽譜は使用せず「六段の調」「千鳥の曲」「摘草」などを演奏できた。そこへ時間を作っては尺八を持って通い、合奏に夢中になった。メキメキと腕を上げる木島超道に対応しきれなくなつた林夫人は、「これ以上は、私には出来

ないから、良い先生を紹介します」と言つて、当時上湧別で活躍していた山田流の村上登代子先生を紹介してくれたのである。

村上先生の夫君は村上祥雲と号し、地域では名の通つた琴古流の大家だった。また、現在生田流正派の幹部として活躍している娘さんの寿子さんも、当時は母親とともに山田流だったので、村上先生親子に合奏してもらい、木島超道は合奏力に磨きをかけたという。

当時、渚滑方面には久慈寛道門下の大平緑道と大平晴山の兄弟や紋別小学校の教頭をしていた小比賀雪僮、更には現在新都市流で活躍している古賀誠山や菅原宵山も、玲瓏・宵僮の名で上田流にいたので、秋の芸術祭などでは一緒に舞台を踏むこともあった。小比賀雪僮は満州からの引揚者で、遠軽に住居したこともあったが、昭和三十六年頃には退官して札幌へ転居した。

昭和三十三年九月二十二日(日)午後六時半から渚滑鉄道倶楽部で開催された「尺八鑑

賞の夕」は、国鉄勤務の木島超道と岡下輝道が中心になって開催したもので、糸方には村上親子の賛助出演を得て、十番を演奏した。この時木島は古曲「秋の言の葉」を村上登代子と、そして新曲「秋の調」を村上寿子と演奏した。



このほかに当時紋別で活躍していた人としては、青山呂僮に師事し、のちに高橋宇山に転門した柴田公僮がいた。高橋宇山は久慈寛道の高弟で船乗りの関係から、稚内や紋別を地盤に尺八教授をしていた人物である。

函館五孔会の活動

木島超道は深川から函館に移り住んでいた両親と同居するため、昭和三十四年十月に希望して函館に転動した。その頃函館方面では帯広から大野農業高校に転任して校長を務めていた庄司篁僮が「函館五孔会」を組織して活躍していた。庄司篁僮は教育者たる風格を持ち、無理のない吹奏で、とてもきれいな音を出していたという。函館五孔会のメンバーとして活躍していた人は、青木呂僮直門の上林吃僮やアサノセメント会社に勤務する阿部峨僮・田中・阿部、そして国鉄勤務の田沢沢道・朝水秀月・桜井

川口などで、上田流が丸となって活動していた。特に阿部峨僮は熱心な吹き手だったが、惜しいことに若くして他界していった。

芸熱心だった木島超道は「函館五孔会」のメンバーとしても活躍し、昭和四十一年五月に准師範を許され、飛龍軒木島偉童と号した。

門人が師匠の免状を申請

木島偉童の師匠である田畑偉山は国鉄職員で、稚内勤務のとき高橋宇山の指導を受けた人である。その後名寄に転動となり、昭和二十五―二十六年には深川勤務となった。名寄や深川に門人が多いのはそうしたことになるものである。

久慈寛道門下に入っていたことから邦楽研精社の会員となり、一時上田流から離れざるをえない時代があった。

しかし、久慈寛道が発行する邦楽研精社の免状では世間に通用しないと考えた田畑偉山は、宗家芳僮に直接交渉して、再度上田流免状の取得の道を開いたのである。

木島と岡下の両氏は師匠である田畑偉山から上田流准師範の免状はもらったものの、高齢により師匠の音楽活動が停滞するに伴い、それ以上の免状申請をしてももらえないままとなっていた。そこで宗家に相談した結果、師匠の田畑偉山が准師範の資格しか持っていない現状では、師匠を越える免状は出せないとの回答を得た。他社中の竹友

と同様に資格を取得したいと望んだ両氏は、田畑偉山の師範免許状を宗家に申請するとともに、自分たちも同時昇格の申請をして、昭和四十六年七月付けで師範となったのである。当時、師匠の田畑偉山は心臓病でほとんど尺八は吹けない状態だった。その後、田畑偉山が八十四歳で他界したため、昭和四十九年四月十日には宗家直門として臥龍軒・大師範に昇格した。

北見で国鉄の機関士をしていた内田明僮が、京都で医者をしている息子を訪ねがてら大阪へ向かう道すがら、愛管を持って突

然函館に立ち寄り、木島宅で一緒に合奏をしたことがあった。その時免許状の話となり、既に臥龍軒・大師範を取っていることもあり、先輩の内田明徳が大阪訪問の際直接宗家上田芳徳に、名譽師範の称号である臥龍斎の申し入れをしてくれた。直ぐに宗家から本人の意思を確認する電話があり、昭和五十五年三月に臥龍斎を許されたのである。

### 久慈寛童の芸術論

北海道の上田流には二つの流れが存在した。その一つは、宗家上田芳徳の内弟子だった青山呂徳が組織した美登里会であり、もう一つは宗家補佐役の上田竹童の流れを汲む久慈寛童が組織した竹社会である。

竹社会の会主・久慈寛童は北見の出身で道庁に勤務し、課長にまで昇進した人物である。道庁時代に教えた佐々木忠徳は、後に渡島支庁長を務め、函館五孔会にあって重要な役割を果たすとともに、上林吃徳の葬儀万端を執り行うなど責任感の強い人だった。



久慈寛童

昭和三年八月四日(土)午後六時半から、旭琴会主催の夏季音楽大会が、琴似村の琴似館で開催された。出し物は長唄、箏曲、琵琶、バイオリン、マンドリンなど邦楽洋楽取り混ぜたもので、邦楽では長唄「越後獅子」「都鳥」「岸の柳」「喜三の庭」等が演奏された。出演者は三絃・今川幸衛、唄・松本兼子、尺八・飛龍軒久慈寛童、石田昇童、齊藤玉洞などである。従って久慈寛童は昭和三年夏には上田流准師範として、札幌を中心に活躍していたといえよう。

昭和三年十月二十七日午後五時から、苗

穂公会堂で北海道竹社会の苗穂講習所開設披露演奏会が開催された。久慈寛童はじめ竹社会会員が参加し、本曲・箏曲・長唄など十一番を演奏した。

昭和十一年には師範に昇格し臥龍軒を名乗るとともに、札幌市北三条西二十一丁目自宅に北海道竹社会の本部を置き、盛んな音楽活動を展開していた。同年六月二十日からは一週間の予定で道内各支部を講習して回っている。

芸の上でも単なる教授業にとどまることなく、作曲・作詞を行うなど道内邦楽界の中でも、貴重な存在だったといえよう。また、演奏に関しては、ただ楽譜を解説して発音する機械的な演奏を嫌い、曲想を理解した上での演奏を強く求めた。

歌詞のある古曲は曲想をつかみやすいが、歌詞のない尺八本曲は難解だしながらも、自らの解釈を公表して、上田流尺八道の隆盛を願った。「芸術グラフ」の昭和十一年九月号に投稿した「演奏曲の表意教種」の前文を掲載して、久慈寛童の尺八音楽に対する姿勢を披露する。

「古来邦楽は三曲を以て其の最となす。而して曲は曲意を以て生命とし、演奏に際し之の伴う事なくんば恰も解説なき無声映画に等しく、いささかも興味ある事なし。されば奏者はただ運指の円滑と音韻の強大ならびに對者との合致のみを念とする事なく、歌詞と旋律の表情に依りて、曲意を案じて以て曲想の表現に努むべきなり。」

されど本曲に歌詞の存する事なし。依て斯の種の曲は旋律の表情のみを基調とし、これを案ぜざるべからず。難なるかな。今左にこれが曲想を記述し、以て道者の参考に資せんとす。心して究むべきなり」

こうして久慈寛童の尺八音楽に対する芸術論ともいえる前文の後に「霜月」「舟遊び」「平和の光」など二十四曲を解説している。このように音楽的才能に恵まれていた久慈寛童には、大正十二年四月来道した青山呂徳に負けたくないとの意思が強く働いていたであろう。

### 専門師匠を夢見て

久慈寛童は昭和十八年道庁を退職し、尺八専門家として生きる希望を抱き、故郷の北見へ向かった。北見地方には久慈寛童の直門高橋宇山や孫弟子の内田明徳などが中心になって築き上げた、上田流竹社会の地盤があった。専門師匠としての久慈寛童が北見に転居したことによって、道東・道北に於ける上田流の勢力は急速に強められる結果となった。流勢の安定とともに自信を深めた久慈寛童は、昭和二十二年大阪より宗家補佐役の上田竹童を招聘して、講習会を開催した。しかし、その後家庭の事情により、昭和二十四年には苦勞して築き上げた社中を捨て、単身帯広に転居することになった。

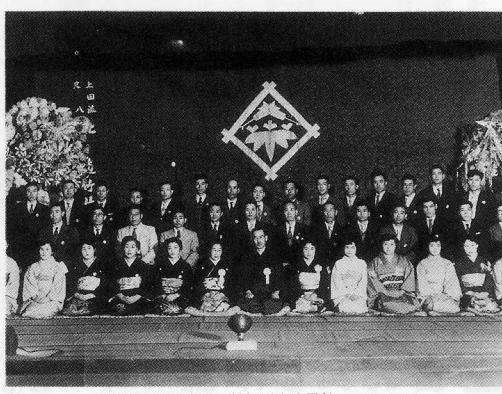
帯広は青山呂徳の地盤だった。札幌で青山呂徳に手ほどきを受けた作田呂徳が、昭和二年に十勝農業高校の教師として赴任し、同じ学校で教師をしていた庄司篁童らを育てて、十勝地方に上田流の穂を入れたのである。そして、昭和四年四月六日には帯広の栄楽座で、札幌から青山呂徳を招聘して帯広美登里会の演奏会を開催している。

しかし、その後の転動により作田呂徳や庄司篁童らが離帯したこと、十勝地方の上田流は戦後衰微の一途をたどった。昭和二十四年久慈寛童は帯広に居を構えるとともに、箏曲教授をしていた婦人と家庭を持ち、上田流復興に力を注いだ。しかし、一度衰微した流勢を再興するに到らず、三年足らずで新派創設を夢見て旭川へと居を移した。

### 独立して邦楽研精社を設立

旭川に転居した久慈寛童は、昭和二十七年一月に邦楽研精社を設立し、自ら宗家久慈寛童を名乗り、田畑偉山が築いた地盤を基に、名寄・深川も含め道北一帯に勢力を伸ばした。既存の上田流から独立して三年が経過した昭和三十年六月十三日、久慈寛童は新派の存在を余に問うため、旭川市公

民館で邦楽研精社の技芸発表会を開催した。この会は夫人、久慈節以の門人繁原満美以の教師昇格披露を兼ねてはいたが、事実上邦楽研精社の創設記念演奏会だった。演奏会は二部構成で十八番を掲げ、二部の開幕には宗家久慈寛童作曲の尺八楽慶祥楽を門弟三十人が演奏した。また十八番目のトリでは久慈夫妻による新曲「春の海」が披露された。注目すべきことは、この会に地元を代表して都山流の森川想山と琴古流の小森笙吉が客員出演していることである。これは久慈寛童との尺八界での付き合いというより、むしろ夫人のつながりによるものと思われる。



邦楽研精社演奏会 於旭川市公民館 S 30. 6. 13

勢いに乗った久慈寛童は、邦楽研精社を東北地方に広めたいとの希望に燃え、昭和三十年頃旭川から函館に移転した。しかし、転ぶ石には苔生えずで、活動の場を転々とする余り、門人も固定せず次第に進むべき道を開かず結果となった。函館では上磯町にあるアサノセメント会社の寮などでも尺八を教えたが生計をたてるまでには到らなかった。

木島偉童が昭和三十四年秋に函館に転居したときには、既に久慈寛童は美幌に引き揚げ、自衛隊員に書道と囲碁を教える生活を余儀なくされていた。

# 琴古流渉風社の誕生

中島 聖山



高橋渉童

## 武道に通じる尺八道を求めて

北海道の尺八専門師匠の中にあつて、唯一会派の家元にまでなつた高橋渉童は、明治三十二年一月十日に山形県東村山郡山辺町で生まれ、本名を初喜と言つた。幼少のころから武術に興味を示し、剣道は勿論のこと、柔道や古流水泳にも通じて、生涯古武士の風格を持ちつづけたという。

高橋初喜は大正七年四月、十九歳の時に、前年の大正六年頃から札幌に来ていた琴古

流川瀬派の水口朔呂(後の紫海)に入門し、

琴古流尺八を始めた。武術をたしなんでいた高橋初喜にとって、尺八道は武術の極意とも言うべき、集中力の涵養と呼吸法の習得に共通点を持っていた。高橋初喜が入門後、非常に早いテンポで専門家の志を決め、尺八道に邁進していった背景には、こうした幼少の頃から身につけていた武道の素養が大きく影響していたものと考えられる。その証拠に、入門後わずか一年十カ月の

大正九年四月には童号を許され、高橋紫童

と名乗るとともに、恩師水口朔呂の紫友会を継承している。推論ではあるが、彼が二年足らずで紫友会を継いだ要因の一つとして、水口朔呂の退札があつたのではないだろうか。

## 大志を抱いて上京

高い芸術性を望んでいた高橋紫童は、札幌ではこれ以上芸を磨くことが出来ないかと判断したのか、大正十二年二月厳寒の札幌を後に、尺八専門家を志して上京した。上京後は琴古流水野派の宗家、初代水野呂童に入門し師事した。

尺八専門家として身を立てることを決意していた高橋紫童は、将来の事を考え加藤雄童の内弟子となつて製管の技術も習得したのである。また、東京在住中は同郷の先輩として川瀬派の初代川瀬順輔の知遇を受けたという。

高橋紫童は上京の一月前に都山流との合同演奏会に出演し、遠藤操琴と同じ舞台を踏んでいる。この会は都山流康琳会の高本康奏と琴古流の笠川二郎が幹事となり企画したもので、大正十二年一月十四日に太平館を会場に開催された。当日は竹方とし

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

# 川村楽器店

札幌市中央区南3条西2丁目(HBC三条ビル) ☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。



日 時	会 場	出 演 者
大正14年8月1日	網走町演芸館	遠藤操琴・高橋涉童・山田・三浦・その他
8月30日	野付牛町北見劇場	遠藤操琴・高橋涉童・可香谷りの・里野
9月1日	根室町根室劇場	遠藤操琴・高橋涉童・その他

て都山流の畑中康山や琴古流の高橋紫童が出演し、生田流の遠藤操琴や山田流の新田佐美治などが糸方として賛助出演している。当時、札幌の琴古流には畑中康山のような、宗家派遣の師匠として組織的な支援を受けつつ、思う存分音楽活動に専念している人物がいなかっただけに、高橋紫童にとって畑中康山の存在は強い刺激となっていたに違いない。

もしかするとこの合同演奏会は高橋紫童の壮行会を兼ねていたのではないだろうか。そして、若い高橋紫童の才能を評価し上京を勧めたのは、東京の邦楽界に精通していた遠藤操琴だったのかも知れない。

上京して一年を少し過ぎた大正十三年五月、高橋は水野呂童から童号を許され、涉童を名乗った。念願だった童号の取得は高橋涉童に夢と希望を与えたに違いない。高橋涉童は翌大正十四年の夏、郷里の北海道に帰って修業の成果を発表する機会を得たのである。生田流国風音楽奨励会の遠藤操琴との一か月に及ぶ道東方面の巡演がそれである。この一か月に及ぶ巡演は、邦楽普及のための指導が主な狙いであったが、表に示すとおり、網走・野付牛（現在の北見・根室の三か所で大規模な歓迎演奏会があり、高橋涉童も竹方として出演した。

遠藤操琴は大正十一年春の樺太巡演に際し、北海道の状況を知り、新開地での流勢拡大を夢見て同年十月、札幌に分教所を開設して北海道での活動を開始していた。

道東には大正十三年夏に足を延ばし、釧路の公会堂で行われた北条操声主催の歓迎演奏会や、根室の根室劇場での松風会主催

の歓迎演奏会に出演したが、いずれも千人を越える聴衆が会場に押し寄せる盛況で、道東進出の大きな足掛かりとなっていた。

こうした地盤を基に道東入りした遠藤操琴の助奏役として、高橋涉童は思う存分尺八を吹いたのであろう。

この時のエピソードとして、後に高橋涉童は次のように語っている。

「ある初夏の夜、宿でつれづれに遠藤校は同様や流行歌を即興的に筆に手付けして、小さな子供達に教えたり美声で歌ったので、『検校とあろうものが俗曲を弾いては品位がない』といったところ、『若造のくせに生意気だ。これからの筆曲は洋楽と同じように何でも弾けなければならぬ』と、いきなり拳が七つ八つ頭に飛んできてコブが出来て、しばらくは床屋にいかれぬ始末でした。現在筆でジャズ、シャンソン、何でも弾かれるようになりましたが、検校は古典ばかりでなく新日本音楽の先駆者であり、今更ながら検校の偉大さを感じさせられます。」

#### 尺八専門家として独立

遠藤操琴の助奏役としての東北海道巡演が大成功に終わったことから、高橋涉童は尺八演奏家としての自信をいよいよ深めていった。

童号を許されて二年余りたった大正十五年四月、高橋涉童は東京の大岡山で独立し、渉風会を設立するとともに、専門師匠の第一歩を踏み出した。そして、大正十五年一月一日には、東京大岡山赤松寿司屋の階上で、独立後初めての演奏会を開催した。こ

の会には高橋涉童のほか糸方としての長田登良天や平沢など渉風会会員が出演した。プロになったとはいえ舞台を踏む数には限界があったことから、収入源は何といっても門人からの月謝に頼らざるを得なかった。そのため積極的に稽古場を開設しようと、大正十五年十二月には東京神田区にあった野村レンズ店の一室を借りて出張稽古を開始した。

プロの尺八家として次第に生活基盤も整ってきた昭和三年五月二十日、高橋涉童は神田区駿河台の主婦の友社講堂で開催された第三十八回洞風会（水野呂童主宰）の演奏会に出演し、「寿くらべ」を演奏した。

この頃から高橋涉童は北海道に戻って活路を開こうと考えていた。そして、洞風会の演奏会後、遠藤操琴と連絡を取り樺太巡演の準備を始めたのである。暑い東京を後にした高橋涉童は、八月下旬札幌で遠藤操琴と合流して、一路目的地の樺太へと出発したが、期間中落合青年会館と大泊劇場の二回、歓迎演奏会に出演している。特に九月十五日に大泊劇場で開催された歓迎演奏会では、地元都山流康琳会の会員も一緒に舞台上に上がった。

こうした二回に渡る巡演に参加し、北海道や樺太における邦楽界の現状を目の当たりにした高橋涉童は、一日も早く帰道し、五年間に及ぶ東京での修業の成果を発揮したいとの思いにかられたのである。

#### 札幌で専門師匠の活動開始

昭和四年十一月、高橋涉童は札幌に移住するとともに、渉風会の事務局を札幌に移し、北海道の数少ない尺八専門家の一人として、尺八教授や演奏活動を始めた。

昭和六年五月、琴古流水野派の大師範に昇格した高橋涉童は、渉風会を渉風社と改称し、新たな前進を決意したのである。同じ年の六月二十八日、高橋涉童の大師範昇格を祝って、札幌の今井記念館で演奏会が開催された。これは渉風社の記念すべき第

映像の時代、残しておきたいと思ったら……

# ソニックスアッポロ

電話 772-2528 札幌市北区篠路町上篠路101-28

一回目の演奏会であり、会には琴古流鈴慕会の第一人者である藤沢鈴昭など、多くの賛助出演があり、渉風社の門出にふさわしい盛大な演奏会であった。

北海道での高橋渉童の活躍ぶりは、水野派の中でも高く評価されはじめ、全国79カ所ある水野派の尺八教授所の一つとして、札幌市南一条西十丁目の渉童宅の稽古所が北海道で唯一名を連ねた。高橋渉童の活動範囲は札幌を中心に、道内はもろろんのことと樺太方面にまで及んだ。門人の数も次第に増えはじめ、渉風社の演奏会も、毎年定期的に開催されるまでになった。特に糸方として遠藤操琴とのつながりが深く、定期演奏会には必ずといっていいほど賛助出演している。こうした国風音楽奨励会との縁によるものであろう、この会で活躍していた人と夫婦の契りを結ぶことになったのである。

昭和八年四月二十三日、市内で行われた渉風社の演奏会で、糸方として遠藤操琴に並び、高橋操秀の名が初めて現れていることから、この会が高橋渉童の結婚を祝う会ではなかったか。

家庭的にも落ち着きを得た高橋渉童は、音楽活動に拍車をかけ、精力的に舞台上に臨んだ。昭和八年六月十七日には砂川劇場で行われた小林佐都美主催の華美会の演奏会に遠藤操琴と出演するとともに、同年七月十五日には旭川商工会議所で開催された国風音楽奨励会旭川支部の華演奏会に出演するなど、名実ともにプロ尺八家としての充実した日々を送った。

### 三世荒木古童の芸に心酔

札幌に転居してから六年が経ち、高橋渉童の知名度が上がるとともに、門人の数が増え、演奏会出演依頼の回数も次第に増えはじめ、多忙な毎日を迎えたものの、高橋渉童の心の中には、どこか虚しい満たされないうものがあつた。

それは、自分の芸との対峙であり、より高い芸術への目覚めと、道内では目標が得

られない虚しさとも焦りだつたに違いない。昭和十年五月二日の三世荒木古童の死によつて、芸を磨くには躊躇している時間はないと判断した高橋渉童は、再び上京を決意し、昭和十年六月東京へと向かったのである。

しかし、大正十二年の冬に尺八専門家を志して上京したときは状況は違つていた。自分の芸風にも充分自信は持つていたし、尺八専門家としての生活の基盤も確立していた。それだけに確固たる目的を胸に上京を断行したのである。その目的とは琴古流荒木派宗家、荒木古童から直接荒木派の手法を学ぶことであつた。尺八演奏家としての力量を有する高橋渉童にとつて、荒木派の手法習得にはそれほど長い時間は要しなかつた。

東京在任中に、梅旭と号した後の四世荒木古童に師事し、荒木派の基本的な手法を身につけていた高橋渉童は一年余りで当初の目的を達成し、帰札したのである。

三世荒木古童の芸に心酔していた高橋渉童にとつて、芸風を引き継いでいる四世荒木古童から、短い期間とはいへ直接荒木派の極意を学んだことは、後の尺八人生に大きな自信と希望を与えたであらう。

帰札とともに渉風社の充実拡大のため活動を開始し、昭和十一年五月二日に今井記念館で開催された「故新田佐美治追善演奏会」に出演している。この会には琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭や都山流康琳会の畑中康山など、札幌の尺八界を代表する専門師匠や、横山光喜勢など糸方各流派の会主が出演した。

続いて同年六月七日には帰札後初めて、渉風社の演奏会を今井記念館で開催している。東京での修業の成果を発表する場となつたこの会には、遠藤操琴を糸方に招き、渉風社の将来を賭ける演奏を行ったという。

### 渉風社の発展

高橋渉童は演奏家としての力量を高める一方、門人の育成にも力を注ぎ、生田流国

風音楽奨励会の遠藤操琴とコンビを組みながら地元糸方とも親交をあたため、札幌の三曲界の重鎮としての地位を確立していった。また、荒木古童やその高弟など東京を中心に活躍する専門家達からも高い評価を受ける存在になつていった。

昭和十一年八月十日には、荒木古童の高弟である飯倉豊童が東京から来札し、二十日までの約二週間高橋渉童宅に滞在して講習会を行つていく。

この時、飯倉豊童は高橋渉童の勧めでNHK札幌放送局でラジオ放送の録音を行つた。演奏曲は古曲の「里の暁」と古典本曲の「鹿の遠音」で、里の暁は地元糸方の橋本賀寿井、高橋操秀と合奏し、鹿の遠音は独奏した。この演奏は八月十八日午後八時三十分からの邦楽番組で放送された。

この頃高橋渉童は、札幌市南大通西七丁目自宅に渉風社の本部を置き活躍していった。

### 札幌三曲協会の会長に就任

昭和十五年六月二十六日、大日本三曲協会が設立された。一党一派がしのぎを削る芸の世界に協会が出来たのには、それなりの理由があつた。第二次世界大戦も日本の戦局が悪化の一途をたどりだしたこと、国内における統制は厳しさを増していった。歌舞音曲にたずさわる人達にとつて、この統制は生活を脅かすものだった。

昭和十五年二月一日付けで興行取締規則が改定され、興行を生業とするものにはすべて許可を要することとなつたが、同年四月二十日付けを持って教授を生業とするものも同様に、警察の許可を要することとなつたのである。こうした統制令の動きに基づき、警視庁保安部の指導の基に大日本三曲協会が組織され、在京の三曲教授家達は警視庁への許可申請とともに、三曲協会への入会を義務づけられた。

こうした中央情勢の動きを受けて、札幌でも昭和十六年春から三曲協会結成の機運が高まつていった。日本各地で三曲協会の

組織化が聞かれる中、昭和十八年七月十日に琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭の提唱により、札幌三曲協会が設立された。この時、高橋渉童は琴古流尺八を代表して理事に就任した。

昭和十八年十二月五日、札幌鉄道倶楽部で札幌三曲協会主催の合奏研究会が開催されたが、この会には高橋渉童のほか会長の藤沢鈴昭や都山流の吉田敬山らが参加している。

昭和二十二年七月八日、初代会長の藤沢鈴昭が他界したことから、高橋渉童は札幌三曲協会の二代目会長に就任し、昭和四十年六月までの十七年間、会長として札幌の三曲界に貢献したのである。

### 琴古流門会の宗家に就任

道内における数少ない尺八専門師匠としての活躍は、道内知識人の評価を受け、昭和二十五年十一月には北海道における尺八指導邦楽普及の功績により、北海道教育委員会より北海道文化奨励賞を受賞している。

また、昭和四十九年九月の全国琴古流尺八正系派の統一に際して、「琴古流宗家重門会」が結成されたが、この時の初代宗家として高橋渉童は人間国宝の納富寿翁らとともに家元に就任したのである。

尺八道を極めた高橋渉童は修業時代のことを次のように述懐している。

「芸修業をしている間の苦勞なんか、苦勞ではありません。修行中なんかは寝ている間でも頭の中で、いろいろ勉強したものです。(苦勞と言えは)内弟子時代に吹くことが出来なかつたことです。それでよく小石川のお寺の境内で吹いたものです。夜遅くなるのも忘れて、お巡りさんに注意されたこともしばしばです。」